

生活場面における幼児の位置関係 —大学生との比較を基に—

坂東 夢菜*・吉澤 千夏**

(令和5年8月25日受付；令和5年11月6日受理)

要 旨

本研究は幼児の生活場面における位置関係の特徴について大学生との比較から明らかにすることを目的とし、N県J市内の幼稚園に通う年長児21名を対象に食事場面と遊び場面の観察を行うとともに、N県J大学の学生216名にアンケート調査を行った。分析の結果から、以下の点が明らかとなった。

(1) 幼児の食事場面では、仲の良さに関わらず、同性の友人に対して隣の席が最も多く選択され、異性の友人に対しては前の席や斜め前の席が選択された。幼児の遊び場面においても特に仲の良い同性の友人に対しては、隣の席が最も多く選択された。

(2) 友人との位置関係を性別で比較すると、食事場面では男女共に、仲の良さに関わらず同性の友人に対しては隣の席が、異性の友人に対しては前の席が最も選択された。遊び場面では男女共に、特に仲の良い同性の友人に対しては隣の席が選択された一方で、同性の友人と異性の友人に対しては、男児は直角の隣の席、女児は離れた直角の位置が最も選択された。男女間での比較の結果、選択する座席位置に男女間で有意差はみられなかった。

(3) 幼児と大学生の位置関係をみると、食事場面、遊び場面の両場面において、幼児、大学生ともに同性の友人に対して隣の席が最も多く選択されたものの、大学生よりも幼児の方が隣の席を選択するものが多く、幼児よりも大学生の方が前の席を選択するものが多かった。

KEY WORDS

positioning 位置関係, 5-year-old children 5歳児, University students 大学生, daily life situation 生活場面

1. 緒言

他者と食事をしたり、作業等を行ったりする際、人は他者との関係の中でどの位置を好むのか。その場の様子や人間関係、その他さまざまなことを考慮しながら、時には意識的に、ある時は無意識に自分の場所を決めたり、決められたりする。それは幼児においても同様であり、例えば家族で食事に出かけた際には、「ママはここ」といって自分の隣を示したり、「ねえねえ、何してるの?」といって友だちのそばにやってきて、その様子をみたりする。このような幼児の姿について、食事場面においては2歳児も4歳児も対面あるいは斜めに相対する位置関係（タテの位置関係）よりも、隣り合わせあるいは直角に並ぶ位置関係（ヨコの位置関係）を好むことが明らかにされている⁽¹⁾。また、外食場面での家族を対象に行った座席パターンの研究では、子どもが1人の場合、子どもの年齢に関係なく、母親が子どもの隣に座ることが多く、子どもが2人の場合、第二子の食事の世話が必要な場合には、第一子と父親、第二子と母親が隣であることが多いことが明らかになっている⁽²⁾。このことから、大人は子どもに対するケアのしやすさから隣となる席を選択していると考えられ、子どもによって座席が選択されているのかは明らかになっていない。一方、大人の飲食場面での座席選択では、男女ともに親密度が増すにつれて座席間の距離が縮まる一方で、女子は親しい者に対して正面の位置が選択され、男子では女子と同様の傾向に加え、横並びの席の選択率が上昇する⁽³⁾こと等が明らかになっている⁽⁴⁾。同性が隣の席にいることは安心感を生み出し、横に並ぶ配置は親しく近い位置関係であり、協力しやすいとのイメージがあることが指摘されており⁽⁵⁾、食事場面における大人の座席選択では、親密度が増すほど正面の位置が選択されやすく、親密ではない関係では対人距離が大きくなると考えられる。

食事以外の生活場面に注目すると、幼児同士の位置関係は遊び場面でもよく観察される。幼児の遊び場面では、友だちと共に何かを行う、つまり一種の協同作業場面が多く見られる。しかし、これに相当するような幼児の遊び場면을対象とした位置関係に関する先行研究は見当たらない。一方、大人の座席選択では、例えば大学の教室での座席位置について、友人関係を優先させるといった要因が指摘されている⁽⁶⁾。また、大学生の試験勉強における座席位置については、食事場面とは異なり、横並びの席を選択するものが多く、未知の相手については横並びの席を選択するこ

とが少ないことが明らかになっている⁽⁷⁾。このように協同場面においては、大人は友人の隣の位置を選択する一方で、幼児の位置関係は明らかになっていない。また、大人の協同場面の結果は食事場面と異なる傾向が見られることから、幼児においても異なる傾向を示す可能性が考えられる。そこで本研究は、食事場面と遊び場面における幼児の座席選択の特徴を大学生との比較を通して明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2. 1 調査対象

対象者は新潟県 J 市内の幼稚園に通う年長児21名（男児8名，女児13名）である。2歳児と4歳児による座席選択の違いの分析から、4歳児に比べ2歳児は着席位置に関する意見を表明することが少ないことが示唆されており⁽⁸⁾、年齢が高い方が着席する際に意味をもって座席選択していると考えられる。そこで本研究では、幼稚園の最年長児である5歳児を調査対象とすることとする。

一方、幼児の対照群として、新潟県内 J 大学の学生216名（男子学生105名，女子学生110名，未記入1名）を研究対象とする。

2. 2 調査時期

調査時期は2018年6月～11月である。幼児については、これらの期間において8回（初回は予備観察）にわたり観察を行う。対象となる園の年長児クラスでは、食事時にグループ分けがなされるものの、食事の際の座席については固定されておらず、その都度、幼児によって選択されている。観察にあたっては、食事場面での座席位置が習慣化されることを避けるため、食事の際のグループである仲良しグループの変更後、原則として1週間以内に観察を行う。

大学生については、同年6月中にアンケート調査の回答を依頼し、その場で回収を行う。

2. 3 調査の内容及び方法

幼児の観察場面は食事及び遊びの2つの場面からなる。食事場面は、各テーブルに着席予定の幼児全員が着席した時点でテーブルごとに画像の撮影を行い、分析の資料とする。遊び場面では、保育室内においてテーブルを利用して遊ぶ様子を1時間ビデオ撮影し、その後、撮影したビデオを5分おきにスクリーンショットし、その際の幼児の位置関係を分析の資料に用いる。

大学生へのアンケートでは、食事場面及び遊び場面における座席選択のデータを幼児との比較に用いるため、食事場面と協同作業場面の2場面について、対象者自身が着席する際に、同性・異性の特に仲の良い友人に対して図1のA～Eまでのいずれを選択するかを問う。なお、以下の分析において、友人を●としたとき、友人に対する回答者の位置関係を、A：隣、B：前、C：斜め前、D：直角の隣、E：離れた直角の位置と呼ぶ。

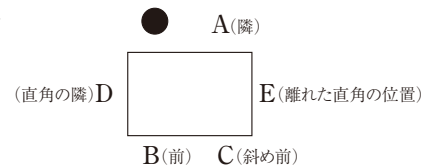


図1 座席の位置関係

3. 結果及び考察

3. 1 幼稚園での観察にみる幼児同士の位置関係

幼稚園における食事場面と遊び場面の幼児の位置関係を明らかにするために、それぞれの場面で観察された位置関係を位置関係毎に集計する。幼児の位置関係の算出に当たっては、予備観察を除く7回分の食事場面及び遊び場面において観察された位置関係を合計し、各位置関係の延べ数をそれぞれの活動に参加した人数で除して%を示している。また、これら2つの観察場面について、幼児間の仲の良さが座席選択に影響を与えているのかを捉えるために、年長クラスの担任教諭に各幼児にとって特に仲の良い友人関係を同性・異性それぞれについて尋ねたところ、幼児同士の関係において、特に仲の良い異性の友人はいなかった。そのため以降は、特に仲の良い同性の友人と、同性の友人、異性の友人に対する位置関係において分析を行う。

3. 1. 1 食事場面における幼児同士の位置関係

まず初めに、食事場面において特に仲の良い同性の友人に対して幼児がどのような座席選択を行うのか、その結果を示したのが表1である。最も多く選択されたのは、特に仲の良い同性の友人に対して隣となる「A」であり、全体

6割以上を占めている。次いで直角の隣となる「D」(17.4%)が選択される一方で、斜め前となる「C」と離れた直角の位置となる「E」は5%に満たない。これらについて χ^2 検定の結果、食事場面での特に仲の良い同性の友人に対する位置関係について人数の偏りは有意である($\chi^2(4)=30.696, p<.01$)。このことから、特に仲の良い同性の友人に対して隣の席である「A」が最も多く選択される席である一方、斜め前の席である「C」と離れた直角の位置の席である「E」はあまり選択されない席であるといえる。

次に食事場面における同性の友人に対する幼児の座席選択をみてみると(表2)、最も多く選択されたのは、同性の友人に対して隣となる「A」であり、全体の約半数を占めている。次いで、斜め前となる「C」、前の「B」の順となっている。一方、同性の友人に対して直角の隣となる「D」と離れた直角の位置となる「E」はいずれも1割に満たない。これらについて χ^2 検定の結果、食事場面での同性の友人に対する位置関係について人数の偏りは有意である($\chi^2(4)=36.154, p<.01$)。このことから、同性の友人に対して隣の席である「A」が最も多く選択される席である一方、同性の友人に対して直角の隣の席である「D」はあまり選択されない席であるといえる。

さらに表3は、食事場面における異性の友人に対する幼児の座席選択の結果を示している。最も多く選択されたのは、異性の友人に対して前となる「B」であり、次いで異性の友人に対して斜め前となる「C」であり、いずれも3割を超えている。一方、異性の友人に対して直角の隣となる「D」と離れた直角の位置となる「E」はいずれも1割に満たない。これらの結果について χ^2 検定の結果、食事場面での異性の友人に対する位置関係について人数の偏りは有意である($\chi^2(4)=60.045, p<.01$)。このことから、異性の友人に対して前の席である「B」が最も多く選択される一方、異性の友人に対して直角の隣の席である「D」はあまり選択されない席であるといえる。

以上の結果から、幼児の食事場面における位置関係について、特に仲の良い同性の友人と同性の友人どちらに対しても、隣の席である「A」が最も多く選択される席である一方、異性の友人に対しては、友人に対して前の席である「B」が最も多く選択され、次いで斜め前の席である「C」が選択されている。このことから、食事場面においては同性の友人に対しては、仲の良さに関わりなく隣が選択されることが多く、異性の友人に対しては、同性と異なり、隣ではなく、友人の前となる席が選択されることが明らかとなる。

表1 食事場面における座席位置 (特に仲の良い同性)
n(%)

A	B	C	D	E
15 (65.2)	2 (8.7)	1 (4.3)	4 (17.4)	1 (4.3)

$$\chi^2(4) = 30.696, p < .01$$

表2 食事場面における座席位置 (同性)
n(%)

A	B	C	D	E
31 (47.7)	12 (18.5)	13 (20.0)	4 (6.2)	5 (7.7)

$$\chi^2(4) = 36.154, p < .01$$

表3 食事場面における座席位置 (異性)
n(%)

A	B	C	D	E
19 (14.3)	49 (36.8)	47 (35.3)	8 (6.0)	10 (7.5)

$$\chi^2(4) = 60.045, p < .01$$

表4 遊び場面における座席位置 (特に仲の良い同性)
n(%)

A	B	C	D	E
22 (47.8)	1 (2.2)	1 (2.2)	12 (26.0)	10 (21.7)

$$\chi^2(4) = 46.310, p < .01$$

表5 遊び場面における座席位置 (同性)
n(%)

A	B	C	D	E
17 (15.7)	17 (15.7)	12 (11.1)	27 (25.0)	34 (31.5)

$$\chi^2(4) = 36.882, p < .01$$

表6 遊び場面における座席位置 (異性)
n(%)

A	B	C	D	E
4 (9.5)	9 (21.4)	4 (9.5)	10 (23.8)	14 (33.3)

$$\chi^2(4) = 16.568, p < .01$$

3. 1. 2 遊び場面における幼児同士の位置関係

次に、遊び場面における位置関係について分析を行う。

遊び場面において特に仲の良い同性の友人に対して幼児がどのような座席選択を行うのか、その結果を示したのが表4である。最も多く選択されたのは、特に仲の良い同性の友人に対して隣となる「A」であり、およそ半数を占めている。次いで直角の隣となる「D」及び離れた直角の位置の席である「E」が2割以上の幼児によって選択されている。一方、前となる「B」や斜め前となる「C」が選択されることはまれである。これらについて χ^2 検定の結

果、遊び場面での特に仲の良い同性の友人に対する位置関係について人数の偏りは有意である ($\chi^2(4)=46.310, p<.01$)。このことから、特に仲の良い同性の友人に対して隣の席である「A」が最も多く選択される席である一方、前の席である「B」と斜め前の席である「C」はあまり選択されない席であるといえる。

次に遊び場面における同性の友人に対する幼児の座席選択をみてみると(表5)、最も多く選択されたのは、同性の友人に対して離れた直角の位置となる「E」、次いで直角の隣となる「D」が選択され、合わせて半数を超えている。一方、「A」「B」「C」を選択しているのは、それぞれ1割程度である。これらについて χ^2 検定の結果、遊び場面での同性の友人に対する位置関係について人数の偏りは有意である ($\chi^2(4)=36.882, p<.01$)。このことから、同性の友人に対して離れた直角の位置の席である「E」が最も好まれる席である一方、同性の友人に対して斜め前の席である「C」はあまり好まれない席であるといえる。

さらに表6は、遊び場面における異性の友人に対する幼児の座席選択の結果を示している。最も多く選択されたのは、同性の友人に対して直角の隣となる「E」が3割以上、直角の隣となる「D」と斜め前となる「B」が2割以上の幼児によって選択されている。一方、異性の友人に対して隣となる「A」と斜め前となる「C」が選択される割合はいずれも1割に満たない。これらの結果について χ^2 検定の結果、遊び場面での異性の友人に対する位置関係において人数の偏りは有意である ($\chi^2(4)=16.568, p<.01$)。このことから、異性の友人に対して離れた直角の位置の席である「E」が最も多く選択される席である一方、異性の友人に対して隣の席である「A」と斜め前の席である「C」はあまり選択されない席であるといえる。

以上の結果から、幼児の遊び場面における位置関係について、特に仲の良い同性の友人に対しては隣の席である「A」が最も多く選択される一方、同性の友人と異性の友人どちらに対しても直角の位置の席である「E」が最も多く選択されている。このことから、遊び場面においては特に仲の良い友人に対しては隣が選択されることが多く、その他の友人に対しては性別にかかわらず、比較的距離のある離れた直角の位置を選択することが明らかとなる。

以上の結果から、食事場面では、仲の良さに関わらず、同性の友人に対して隣となる席である「A」が最も多く選択されている。異性の友人に対しては、友人に対して前の席である「B」や斜め前の席である「C」が選択されている。隣の席とは、対象を同じ方向から見ることができ、共有しやすい位置関係といえる。また、遊び場面においても特に仲の良い同性の友人に対しては、隣の席となる「A」が最も多く選択されており、同じ遊びや関連する遊びを行っていると考えられる特に仲の良い友人と隣に座ることを選択するのは、その遊びを共有するという観点からも妥当な選択であるといえる。

3. 1. 3 食事場面における幼児同士の位置関係の性別による違い

ここでは、幼児の性別が食事場面における位置関係にどのように影響するかを明らかにするために、性別毎に集計し、性別による比較を行う。

特に仲の良い同性の友人に対する幼児の座席選択をみてみると(表7)。男児では、「A」を選択するものが最も多く、およそ9割となっている。次いで「D」を選択するものが1割程度であり、「B」「C」「E」を選択する者はいない。一方女児では、男児同様「A」が最も多く選択されているものの5割程度であり、次いで「D」が2割程度となっており、「B」「D」「E」を選択するものもいる。これらについてFisherの正確確率計算による有意検定の結果、食事場面での特に仲の良い同性の友人に対する位置関係では、人数の偏りは有意でない ($p=.56$)。このことから、食事場面における特に仲の良い同性の友人に対する位置関係は、性別による違いは認められない。

次に食事場面における同性の友人に対する幼児の座席選択をみてみると(表8)、男児において最も多く選択されたのは「A」であり、7割を超えている。「B」「C」「D」を選択したのはそれぞれ1名であり、「E」を選択するものはない。一方女児では「A」が6割弱、「C」「B」が3割程度であり、「D」「E」を選択することは1割程度である。これらについてFisherの正確確率計算による有意検定の結果、食事場面での同性の友人に対する位置関係では、人数の偏りは有意でない ($p=.50$)。このことから、食事場面における同性の友人に対する位置関係は、性別による違いは認められない。

さらに表9は、食事場面における異性の友人に対する幼児の座席選択の結果を示している。最も多く選択されたのは、男児では「B」であり7割程度みられ、次いで「C」も6割程度選択されている。一方で、「E」「D」を選択する男児は1割に満たない。女児においても同様の傾向がみられ、「B」「C」を選択するものが半数程度いる一方で、「D」「E」を選択する女児は1割程度である。これらについてFisherの正確確率計算による有意検定の結果、食事場面での異性の友人に対する位置関係では、人数の偏りは有意でない ($p=.14$)。このことから、食事場面における同性の友人に対する位置関係は、性別による違いは認められない。

以上の結果から、食事場面において幼児が選択する座席位置に男女差はみられない。つまり、仲の良さに関わらず、食事場面では男女共に同性の友人に対して隣の席を選択するといえる。このことから、幼児の食事場面において

「隣」は、性別にかかわらず重要な意味を持つ位置関係であることが示唆される。

表7 食事場面における座席位置（特に仲の良い同性）
n (%)

	A	B	C	D	E
男児	8 (88.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (11.1)	0 (0.0)
女児	7 (53.8)	2 (15.4)	1 (7.7)	3 (23.1)	1 (7.7)

p = .56

表8 食事場面における座席位置（同性）

	A	B	C	D	E
男児	8 (72.7)	1 (9.1)	1 (9.1)	1 (9.1)	0 (0.0)
女児	23 (57.5)	11 (27.5)	12 (30.0)	5 (12.5)	5 (12.5)

p = .50

表9 食事場面における座席位置（異性）

	A	B	C	D	E
男児	11 (33.3)	23 (69.7)	21 (63.6)	1 (3.0)	3 (9.1)
女児	8 (15.7)	26 (51.0)	26 (51.0)	7 (13.7)	7 (13.7)

p = .14

表10 遊び場面における座席位置（特に仲の良い同性）
n (%)

	A	B	C	D	E
男児	4 (80.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (11.1)	0 (0.0)
女児	18 (51.4)	1 (2.9)	1 (2.9)	9 (25.7)	10 (28.6)

p = .67

表11 遊び場面における座席位置（同性）

	A	B	C	D	E
男児	1 (20.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (60.0)	2 (40.0)
女児	16 (22.5)	17 (23.9)	12 (16.9)	24 (33.8)	32 (45.1)

p = .72

表12 遊び場面における座席位置（異性）

	A	B	C	D	E
男児	2 (25.9)	1 (12.5)	1 (12.5)	5 (62.5)	2 (25.9)
女児	2 (8.0)	8 (32.0)	3 (12.0)	5 (20.0)	12 (48.0)

p = .17

3. 1. 4 遊び場面における幼児同士の性別による位置関係

次に、幼児の性別が遊び場面における位置関係にどのように影響するかを明らかにするために、性別毎に集計し、性別による比較を行う。

特に仲の良い同性の友人に対する幼児の座席選択をみると（表10）、男児では、「A」を選択するものが最も多く、およそ8割となっている。次いで「D」を選択するものが1名であり、「B」「C」「E」を選択する者はいない。一方女児では、男児同様「A」が最も多く選択されているものの5割程度であり、次いで「E」「D」が3割弱となっており、「B」「C」を選択するものは少ない。これらについてFisherの正確確率計算による有意検定の結果、遊び場面での特に仲の良い同性の友人に対する位置関係では、人数の偏りは有意でない（ $p = .67$ ）。このことから、遊び場面における特に仲の良い同性の友人に対する位置関係は、性別による違いは認められない。

次に遊び場面における同性の友人に対する幼児の座席選択をみると（表11）、6割の男児が「D」を選択しており、残り4割の男児が「E」を選択している。一方女児では、「E」を選択するものが約半数、「D」を選択するものが3割程度となっており、「A」「B」を選択することも2割を超え、「C」についても1割程度みられる。これらについてFisherの正確確率計算による有意検定の結果、遊び場面での同性の友人に対する位置関係では、人数の偏りは有意でない（ $p = .72$ ）。このことから、遊び場面における同性の友人に対する位置関係は、性別による違いは認められない。

さらに表12は、遊び場面における異性の友人に対する幼児自身の座席選択の結果を示している。最も多く選択されたのは、男児では「D」であり6割程度みられ、次いで「A」「E」も2割以上選択されている。一方で、「B」「C」を選択する男児は1割程度である。女児では、「E」を選択するものが半数程度、「B」が3割程度、「D」が2割程度いる一方で、「A」「C」を選択する女児は1割程度である。これらについてFisherの正確確率計算による有意検定の結果、遊び場面での異性の友人に対する位置関係では、人数の偏りは有意でない（ $p = .17$ ）。このことから、遊び場面における同性の友人に対する位置関係は、性別による違いは認められない。

以上の結果から、遊び場面においても幼児が選択する座席位置に男女差はみられない。性別を問わず、特に仲の良い同性の友人に対しては「隣」を選択することから、幼児の遊び場面においても「隣」は、性別にかかわらず重要な意味を持つ位置関係であることが示唆される。

3. 2 食事場面と遊び場面における幼児と大学生の位置関係の比較

ここでは、食事場面と遊び場面における幼児の位置関係の特徴を明らかにするために、それぞれの場面について大学生の位置関係との比較を行う。なお、大学生へのアンケートにおいても同性の友人、異性の友人それぞれについて調査を行っている。しかし、大学生にとって性別の異なる友人関係は幼児とは異なることが予想されるため、本論文では、同性の友人に対する座席選択について報告する。

3. 2. 1 食事場面における幼児と大学生の位置関係

大学生へのアンケートでは、食事場面については一般的なテーブル席を想定して問を作成したため、図1のうち、「A」「B」「C」のいずれかを選択するものとなっている。そこで、幼児の食事場面での位置関係について、本人と同じ方向からものをみることが出来ること、食事場面で最も多く選ばれた「A」に次いで「D」が多く選択されていたことから、「D」は他の座席よりも「A」に類似する位置関係とみなし、「D」を「A」に統合する。さらに友人に対して離れた直角の位置となる「E」については、友人から最も離れた位置であり、A～Cの中で最も離れた位置が友人に対して斜め前である「C」であるため、「E」を「C」に統合する。以上のことから、以下の食事場面の分析については、「A」「B」「C」の3つの座席について分析を行う。

食事場面における同性の友人に対する座席選択をみると（表13）、幼児において最も多く選択されたのは、同性の友人に対して隣となる「A」であり、8割を超えている。同性の友人に対して前となる「B」と斜め前となる「C」はいずれも1割に満たない。大学生において最も多く選択されたのは、同性の友人に対して隣となる「A」で6割程度であり、次いで同性の友人の前となる「B」で3割程度である。一方、同性の友人に対して斜め前となる「C」を選択するものは1割に満たない。これらの結果についてFisherの正確確率計算の結果、食事場面での同性の友人に対する位置関係では、人数の偏りは有意である（ $p = .02$ ）。このことから、大学生よりも幼児の方が同性の友人に対して隣となる「A」をより多く選択し、幼児よりも大学生の方が同性の友人に対して前となる「B」をより多く選択しているといえる。つまり、食事場面における同性の友人に対する位置関係は、幼児の方が大学生より「隣」を選択し、大学生の方が幼児よりも「前」を選択することが明らかとなる。

表13 食事場面における座席位置（同性）
n(%)

	A	B	C
幼児	19 (86.4)	2 (9.1)	2 (9.1)
大学生	127 (58.8)	74 (34.3)	15 (6.9)

$p = .022$

表14 遊び・協同場面における座席位置（同性）

	A	B	C	D	E
幼児	22 (53.7)	1 (2.4)	1 (2.4)	12 (29.3)	10 (24.4)
大学生	86 (39.8)	43 (19.9)	18 (8.3)	59 (27.3)	10 (4.6)

$p = 0.000$

3. 2. 2 遊び・協同場面における幼児と大学生の位置関係

食事場面における同性の友人に対する自身の座席選択をみると（表14）、幼児において最も多く選択されたのは、友人に対して隣となる「A」で5割を超えている。次いで直角の隣となる「D」が3割程度、離れた直角の位置「E」が2割以上みられる。これに対して大学生では、友人に対して隣となる「A」が4割弱であり、次いで直角の隣となる「D」がおよそ3割、前となる「B」が2割程度みられる。一方、友人に対して斜め前となる「C」や離れた直角の位置「D」は1割に満たない。

これらの結果について、Fisherの正確確率計算の結果、遊び場面での同性の友人に対する位置関係では、人数の偏りは有意である（ $p = .000$ ）。このことから、大学生よりも幼児の方が同性の友人に対して隣となる「A」をより多く選択し、幼児よりも大学生の方が同性の友人に対して前となる「B」をより多く選択しているといえる。つまり、遊び場面・協同場面の両場面における同性の友人に対する位置関係は、幼児の方が大学生より「隣」を選択し、大学生の方が幼児よりも「前」を選択することが明らかとなる。

以上のことから、幼児は大学生に比して、食事場面においても遊び場面においても同性の友人の隣を選択することが多いことが明らかとなる。隣の席は同じ方向から対象を見ることが可能であるとともに、距離的にも前よりも近く、話をしやすい位置関係である。例えば、折り紙をしようとするとき、前に座ってしまうと、相手の行為は自分自身と対称になり、その行為を見て真似することが難しくなる。さらに距離的にも離れてしまうため、会話がしにくい位置関係となる。相手が何をどのように見ているかを把握する共同注意は、乳児以降に形成される様々な能力の発達基盤であることが指摘されており、他者理解や言語発達などにも大きな影響を与えることが知られている⁽⁹⁾。仲の良

い友人と同じ方向から同じものをみられる隣の席は、仲の良い友人が自分と同じものを同じようにみることが可能にし、そのことを通して他者の視点から自分を捉えることをも可能にする。このことが、共同注意を行いやすい隣の席を幼児が選択することにつながっていると考えられる。また、会話の際の視線は、会話の進行を調節したり、相手の反応をモニターしたりする重要な機能を担っている⁽¹⁰⁾ことから、共有する対象に同じ方向から視線を向けることが出来、しかも物理的な距離の近い隣の席は、幼児にとって他者とコミュニケーションを円滑に進めるためにも有効な位置関係であることが推察される。また、幼児間の相互交渉は前よりも横、つまり隣り合わせの関係において盛んになることが明らかにされている⁽¹¹⁾。本研究の結果から、特に仲の良い友人に対して隣の席を選択することが多くみられることから、幼児にとって、隣に位置することは共同注意のみならず、相互交渉を容易に行うことを可能とし、相互交渉を盛んに行うために選択することが示唆される。

4. おわりに

本研究は、幼児の生活場面における位置関係の特徴について大学生との比較から明らかにすることを目的とし、幼児の食事場面と遊び場面の観察と大学生に対するアンケート調査を行った。分析の結果、幼児の食事場面では、仲の良さに関わらず、同性の友人に対して隣の席が最も多く選択され、異性の友人に対しては前の席や斜め前の席が選択された。幼児の遊び場面においても、特に仲の良い同性の友人に対しては隣の席が最も多く選択された。性別で比較すると、選択する座席位置に男女間で差はみられず、男女ともに特に仲の良い友人に対して隣の席を選択することが多いことが明らかとなった。さらに、幼児と大学生の位置関係をみると、食事場面、遊び場面の両場面において、幼児、大学生ともに同性の友人に対して隣の席が最も多く選択されたものの、大学生よりも幼児の方が隣の席をより多く選択し、幼児よりも大学生の方が前の席をより多く選択していた。

以上の結果から、幼児は大学生に比して「隣の席」を好む傾向がうかがわれた。隣に位置することは、同じ方向から対象をみることが可能にし、その対象を共有しやすいといえる。さらにテーブルの前よりも隣の方が、テーブルのような障害物がなく、物理的にも心理的にも距離が近いことが考えられた。それ故に、特に仲の良い友人との位置関係に隣を選択する幼児が多いことが推測された。しかし、隣に位置することが相互交渉を盛んにしているのか、それとも相互交渉が盛んであるが故に隣を選択しているのか、今回の分析からは十分な資料を得ることが出来なかった。また、幼児と大学生の友人との位置関係に関する相違について、隣から前へと好む席の選択が変化していくのは一体いつであり、その要因は何であるのか、今後は小学校期以降の児童や生徒を対象とし、子どもの発達に伴う友人との位置関係や距離感の変化について、さらに詳細な研究、分析が必要である。

なお、本研究の一部は、平成30年度上越教育大学卒業研究（坂東夢菜）において、発表されている。
本研究にご協力いただきました皆さまに心より感謝申し上げます。

引用文献

- (1) 外山紀子（1998）保育園の食事場面における幼児の席取り行動：ヨコに座ると何かいいことあるの？：発達心理学研究 第9巻 第3号 209-220
- (2) 小島康生（2010）外食場面での着席パターンに見る家族発達の特徴—子どもが2人の家族に着目して—：家族心理学研究 第24巻 第2号 146-156
- (3) 松尾貴司（1993）座席選択に関する調査研究：愛知淑徳短期大学研究紀要 第32号 73-79
- (4) 小俣謙二（1992）日本人学生の座席選択にみられる特徴：名古屋文理短期大学紀要 第17号 9-16
- (5) 加藤孝義（1981）座席の選択行動における小集団の対人認知：岩手大学人文社会科学部紀要, 第28号 64-73
- (6) 北川歳昭（1982）座席行動の研究（Ⅲ）座席位置とその選択理由：中国短期大学紀要 第13号 41-48
- (7) 前掲（3）
- (8) 前掲（1）
- (9) 別府哲（2013）発達心理学事典：発達心理学会 244-245
- (10) 山口創（1996）着席行動及び座席配置に関する研究の動向：心理学評論 第39巻 第3号 361-383
- (11) 前掲（1）

Positioning of Young Children in Daily Life Situations : Based on comparisons with college students

Yumena BANDO* · Chinatsu YOSHIZAWA**

ABSTRACT

This study the characteristics of children's positional relationships with their friends in daily life situations, comparing them with those of university students. In all, 21 5-year-old children at a kindergarten were observed in eating and play scenes, and 216 university students completed a questionnaire survey. The results were as follows:

1. At mealtime, most children selected a seat next to their same-sex friends, while they also selected seats in front, or diagonally in front of their opposite-sex friends. During playtime, most children chose a seat next to their close friends of the same sex.

2. With regard to the positional relationship with friends by gender, at mealtime, both boys and girls selected a seat next to their friends of the same sex and a seat in front of their friends of the opposite-sex, regardless of how close they were. In playtime, in both sexes, the next seat was selected for same-sex friends who were especially close, while for same-sex and opposite-sex friends, the next seat at a right angle from the friend was selected most for boys, with the position at right angles away from the friend was selected by most girls. Comparisons between the sexes revealed no differences between the sexes in the selection of seating positions.

63. The following positional relationship was related between the 5-year-old children and university students: although both children and university students selected a seat next to their same-sex friends most frequently in both eating and play, children selected the seat next to them more frequently than the university students, and college students selected the seat in front of them more frequently than the children.